

希望舞台プロジェクト

焼け跡から

西村滋 作「それぞれの富士」より

由井敷 台本・演出

家族で富士山に登る約束だった…



美術 杜江 良
照明 高橋 康孝
音楽 余田 崇徳

振付け 松延 まき子
宣伝美術 原 みちを
タイトル 篠原 鋭一

“孤児達は焼け跡で復員兵の和尚さんに出会った…”



平井 愛子



安岡 和弘



稲積 百合菜

昭和二十年、学童疎開中、東京大空襲で家族を失った子供たちと荒寺を復興しようとする発起、新米和尚の物語。
文男(フー公)は今なお行方不明の両親は生きていると思いい、戦争が終わったなら親子三人で富士山に登る約束を信じている。やるなら勝つ戦争をやれ！と大人の始めた戦争をなじる達平(タツ)は、防空壕の中で焼け死んだ両親と妹を自分の手で葬った。貞夫も、タタミで眠りたいというミー子も、その日の食べものどねぐらを探す同じ孤児であった。寺の跡継ぎを拒否して軍隊に入った大善は、敗走し追われるままに満州の荒野をさまよい復員。お国のために、死ぬ時は一緒に誓った親友の勇敢な戦死を、帰国して知らされた。
焼け跡の残骸が残る上野駅の裏側で野良犬のように追い回される孤児グループ「湯田中組」と出逢った大善。残飯を拾い集め、一つのリングをみんなに分けて合って食べる孤児たちの姿につき動かされて、信州の自分の寺に來ないかと誘ってしまった。
戦争は終わったが、新米和尚と孤児たちの生きるための戦争が始まった…



米田 亘



森 ひとみ



杜江 良



藤田 尚希



高久 律子



井村 倫教



西村 いづみ



溝畑 栄神



初月 佑維



平岡 美保



藤織 ジュン

2016年 3月3日(木)

タワーホール船堀 5階大ホール

134-0091 江戸川区船堀4-1-1 tel 03-5676-2211
都営新宿線船堀駅下車 改札右手出て目の前

■13時30分開場 ■14時00分開演(終演16時10分)
■18時30分開場 ■19時00分開演(終演21時10分)
主催 「焼け跡から」上演実行委員会
共催 一般社団法人和/NPO法人ことのはサポート
後援 江戸川区・江戸川区社会福祉協議会
推薦 東京都仏教連合会・一般社団法人後見の杜・日本仏教保育協会

お問い合わせ・チケット取扱い
「焼け跡から」上演実行委員会
tel 03-5659-5605 / mail kotonoha.jimu@gmail.com
■入場料 ¥3,000

焼け跡から

戦争孤児とおっちゃん
和島てん

孤児いろいろー

西村 滋

(原作)

た戦争孤児とはちがいの真実なものでした。



戦災孤児とは云わない。こだわるようだが、「災」が、自然災害を連想させるので。そして人間達はいづからか、台風でも地震でもない戦争という人工悪を習慣的にまた、不可抗力として自然災害同様のもと思いつつあるみたいなので。

私も孤児ではあつたけれど戦前のことで、両親は病死で葬式も出してもらっています。人間としての尊厳を守られて。一夜に十数万の死者が出た東京大空襲の夜明け、軍隊が来て、ガソリンをぶっかけて処分した遺体の山の中に、自分の親がいるのを見



もつと大切なのは、真実といつてもそれは、戦争孤児のみの特有の真実なものでした。

拙著「それぞれの富士」の二部が、希望舞台によって劇化されることは、芝居好きで、若い頃は戯曲作家を志望したこともある私にはとてもうれしいことなのです。

そして、敗戦後の数年間、子犬がジャレ合うようにして生活を共にしていた戦争孤児の事を生涯忘れられない私は、そのかわいい懐かしい孤児に、舞台の上で再会出来る事に、ドキドキしているのです。

プロフィール

名古屋生まれ。6歳で母を失い、9歳で父にも死別。以後、孤児としての放浪生活が始まる。戦後、戦争孤児の補導員として働き、そのころのことを原点に「平和と子どもをテーマにした作品を書きつけて」。

「山里にも焼け跡からの子がいた」

篠原 鋭一

(千葉県・長寿院住職)



昭和十九年生まれの私には「戦争体験」は無い。また山紫水明の農村地帯で育つたから「焼け跡」も知らない。

けれど敗戦による経済苦は、山里の村にまで襲いかかり、どの家も貧しかった。田舎の小学校に給食など無く誰もが弁当持参している。けれど、午前中の授業が終わると必ず幾人かは運動場の水飲み場に走った。弁当の無いものは水で腹を満たすしかない。

図画工作の授業が始まると用務員のおばちゃんが煮て下さった小麦粉が、小さく切られた新聞紙

にひと匙ずつ分けられていく。ノリの代用である。それを見計らっている。つもすばやい動きを始めるのは常

男ちゃんだ。みんなの机の上に乗っているノリのかたまりをひとさし指でチョツチョツと管めてまわるのだ。けれど二クラス四十四人のクラスメイト誰一人、常男ちゃんを責めなかつた。どこか遠い町に住んでいたが、家も家族も失い、おじさんにひきとられたという。けれどおじさんも戦地から引き揚げた傷病兵、極貧の生活を知っていたからである。実は常男ちゃんも「焼け跡」からやってきた二人だった…。

同じような境遇の正子ちゃんが、卒業式目前にどこかへ行くという。まだ軍人服を着ておられた水島先生が駅まで見送りに行く

なつかしい仲間たち

山田 洋次

(映画監督)



「希望舞台」の仲間たちは、地を這うような苦労をして演劇活動

ぼくの古い仲間である「希望舞台」の仲間たちが、同じようにぼくの昔からの友人である西村滋さんの作品を劇化するの聞いて、胸がわくわくするほどの期待を

を続けてきたグループです。この人たちにこそ、西村滋さんのあの地獄の苦しみを知っている人にだけ表現できる涙と笑いの世界を視覚化することが出来るのだ、と確信します。重苦しい舞台をつくるのはそんなに難しいことではありません。困り裏の火のように暖かくて、凍りついた心がゆつたりと解けていくような、そしていつか観客の表情が明るく頬笑むような、そんな楽しい舞台になることを心から願っています。

